

# 古典の窓

第 2 号 漢文特集 I



敦煌壁画

角川書店

高等学校用

## 高等学校 文語文法

山岸徳平 著  
今泉忠義

### 趣旨と特色

- ★高等学校国語教育の実状に即して、古典読解に必要な文法上の事がらを、穩健中庸な立場から簡潔にまとめた。
- ★事項の配列・説明にあたっては、生徒の学習能力、古典読解の指導との関連性を重視、生きた文法の習得に役立つよう心がけた。
- ★個々の説明では、基礎的・規範的な事がらと、古典読解に必要な事項とを区別し、さらに注意の項を設け、先に学んだ事がらを復習しながら学習できるようにした。
- ★はじめて文語文法を学ぶ人たちのために、口語文法と文語文法とのつながりや、相違を示して、文語文法への入門が円滑に達せられるようくふうした。
- ★難解な語には、適切な脚注を施して、古文解釈・理解・鑑賞の助けとなるようにした。
- ★古典学習の際、最大の難点とされる助動詞、助詞については、格別に注意し多くのページを費やすとともに、それに属する一々の語には、厳密な口語訳を施した。
- ★各章・各節の適当な箇所に問題を挿入して自学自習の便をはかり、さらに巻末に総合問題を付して、補習授業・受験学習にも応じられるようにした。
- ★付録に詳細な〈用語索引〉〈語彙索引〉〈文法表〉などを付けた。

A 5 判 158 頁  
定価 80 円

指導参考書 A 5 判 512 頁 250 円

指導の目標・時間配当・各章の構成・本文の解説・口語訳をふくむ用例の解説などのほか、各章の末尾に学期末試験や補習授業にあたっての補充問題を加えまた特に巻末には総合的な問題と文法學說の対照表を付した。

角川書店 東京都千代田区富士見町 2-7 振替東京 195208 電話 (33) 0111



<李白廟> 晩年の李白は安徽省、現在の南京郊外に寄寓、しばしば揚子江に舟を浮かべて遊んだ。伝説によるとそんなある日、酔いのついで水面に浮ぶ月影をとらえようとして溺死したといわれ、この地に彼の廟がまつられている。

金谷の「如」  
酒数 は仮

定、「不」は否定の助字。「成」はできあがる。完成。「罰」はこの場合、罰杯である。「金谷の酒数」は故事をふまえている。金谷は六朝の晉の石崇の別荘、金谷園のことである。石崇が詩人をここにあつめて宴会をひら

なあとびをうけついで、いわば伝統的なふんいきである。そしてこの文章の形式も、六朝式の駢文であって、李白ののちの韓愈が文体を革新したことから考えてみると、そこには新らしさが見られない。どちらかといえば李白は伝統に忠実であった。しかしながら、この文章には青春の息吹きがみなぎっている。伝統的な感情をもちこみ、伝統的な形式でのべているにかかわらず、李白はそれをわがものと消化して、十分に個性を發揮している。何べんよみかえても、こころよい文章である。いや、文章というより、これはやはり詩といふべきであらう。

(大阪府立高津高校教諭)

### 角川文庫

孔子の人物・生涯を余すところなく探求し、論語を理解するための手近な概論書である

菜根

譚

¥70

人間はいつも菜根を食っておれば何ごととやれる漢民族の好む徳目学が平易に語られる

法句經講義

友松 円 諦

¥100

永遠の詩人釈迦が詩の型に託して述べた「法句經」を經典の堅苦しさもなく平明に説く

禪とは何か

鈴木 大 拙

¥70

現代的学識と深い禪経験により、世界的禪学者が平明に概説した講演録をここにまとむ

角川文庫

(杜甫像)



## 杜甫・人と作品

田中克己

俗物すべて  
茫々たり

杜甫は西暦七一二(睿宗先天元年)に生まれ、七七〇年(代宗大暦五年)に死んだ。その生涯を通じて不遇な人であった。体も弱く、晩年は病に苦しめられたが、彼を不遇ならしめたのは、なによりもその生れつきの性格であった。いいかえれば、詩人に生れついたことが、その人を不遇にし不幸にしたのである。しかしかく純粹に詩人であったことが、その死後、今に至るまで、彼を中国第一、いな世界でも指折りの詩人としての名を伝えたのである。

杜甫みずから、死後の名声はともかく、自己の純粋な詩人的性格には気づいていて、その詩「壯遊」では、その半生を叙して、ついに世に容れられないありさまをくわしく述べているが、しかもそれが少年時代からであったことを

嫉悪懐剛腸  
脱略小時輩  
結交皆老蒼  
飲酣視八極  
俗物都茫茫

悪を嫉みて剛腸を懐く  
小時輩を脱略し  
交を結ぶはみな老蒼  
飲たけなはにして八極を視れば  
俗物すべて茫々たり

という。少年にしてすでに酒をたしなみ、悪をにくみ、同年輩の者とはつきあわず、年長者とばかり交際したというのである。中でも酒たけなわになれば、八方を見るか、俗物輩ばかりなのに憤慨もし、これを見さげるさまをあらわにしたのである。俗物とは何か、詩人でないものにはかならない。この詩的精神がきびしければきびしいほど、人は孤立しなければならぬ。ここにすでに杜甫の不遇であるべきことが定められていたのである。

性豪業嗜酒

性は豪にしてすでに酒を嗜み

三十代前後

しかし彼は青年時代を官吏たるべく苦心する。そのせいもあるが、彼の詩の完成はおくれる。いま残っているその作品千何百篇は、もとよりその全作品でない。未完成のものは彼みずから棄て去ったというものがあるが、もしそうだとすれば、すてたものはおおむね青少年時代の作品であろう。李白とちがって彼の作品は大部分は制作年代がほぼ推定できるが、現存の作品では、三十代までのものはすくなく、しかも佳作と見なされるのは、わずかに三十八歳の時に、韋済に贈った詩があるのみで、これとても泰西の詩人たちにくらべると、ずいぶんの晩成である。もとよりこの作は彼の詩の中でも指折りの傑作というのではなく、このあと三年にしておこった南詔遠征をうたった「兵車行」のほうがずっとすぐれている。そしてそれからまた四年めに、国全体を混乱にまきいれた安祿山の乱以後になると、はじめて杜甫は彼でなければ書けないものを、それこそつぎつぎに示すのである。晩成と同時に、想像だけでは作れないような好テーマが、こうして自然と眼前に展開して、はじめて詩人として大成し得たのである。

しかしこういってからといって、杜甫の詩人的才能をうたう必要はない。このいわゆる詩の好テーマ、悲惨なる戦争は、実はほとんどすべての盛唐の詩人の実見したところである。しかも他人はこれをうたい得なかった。うたっても杜甫ほどありありとうたい得なかった。題材適所ということばがあるが、杜甫は実にこれをうたうべく生れて来た感じである。

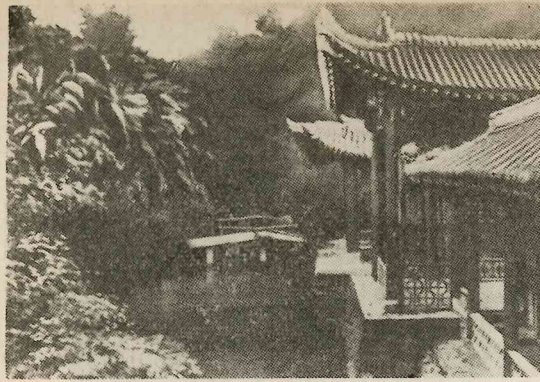
酒肉の臭 安祿山の乱は、突然おこったものではない。識者の凍死の骨 中には、早くからこれを予言していたものがあつた

老大意転拙 老大にして意うたつた拙なり

という句ではじまり、みずから布衣と称しているが、実は杜甫はこの年はじめて官を授けられた。従八品下の小官ではあるが、もはや布衣すなわち無官の平民ではなくなったのである。しかもこの頃の長安での生活難のためであろう、疎開しておいた妻子のいる奉先県に赴く。みちは折しも玄宗皇帝が楊貴妃とともに寒を避けている驪山の温泉宮の下を通る。多く随従している大官とはちがって、入ることをゆるされない杜甫は、宮廷の生活をさながらのあたり見るかの如く写し出すが、この描写の最後には

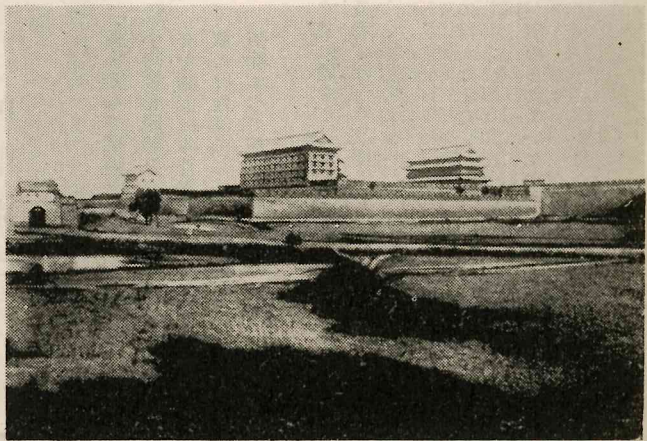
朱門酒肉臭 路有凍死骨 朱門には酒肉臭 路には凍死の骨 有り

という有名な、対句がある。諷刺と激の語である。これを文字であらわすことこそ貴族政治の時代において



<驪山の温泉> 驪山には既に北周・隋時代に離宮があつたが、唐の玄宗皇帝はここに温泉宮を建て、華清宮と称し、寵妃楊貴妃とともに毎年の冬をおくった。白居易はその《長恨歌》に「春寒くして浴みを賜う華清の池 温泉の水は滑かにして凝脂を洗う」とうたっている。

<長安城> 青年時代の放浪生活を断つて、杜甫が長安に入ったのは745年ごろのことである。当時の彼は官吏になるべく苦心するが、志を得ぬままに歳月は流れ、やがて安祿山の乱に長安は渦中に吞まれる。歡樂の夢を破られ、玄宗皇帝は楊貴妃を連れて長安を去る。妻子を延安付近の鄜州(ふしゅう)に送り、肅宗のもとに向かった杜甫は敵中に捕らわれ長安にひかれる。翌759年、彼は脱出するが、この長安幽閉中に作られたのが「国破れて山河在り 城春にして草木深し……」の名作である。再び肅宗のもとに参じた彼は、左拾遺の官にのほり、乱平定後長安にもどるが、長安は以前の長安ではなく、彼の心は暗い。



という。敏感な詩人である杜甫もこれを感じていた。ただ感じただけではなく、それをうたっている。これは杜甫にとって大いに誇ってよいことである。彼の作品中、最も長い「自京赴奉先縣詠懷五百字」は、ただ長いばかりでなく、あらゆる意味ですぐれているが、乱の直前の作品であるにふさわしく、その来るべくして来たことを後人にうなずかせるものである。この詩は

杜陵有布衣 杜陵に布衣有り

は、最も危険な行為であったのである。たとえ罰は幸いにまぬがれたとしても、将来の栄達なぞ望み得なくなることを敢行したのだが、実はこのとき彼は将来の栄達どころか、現在その一家の生計さえ立てかねていたのだった。

人間への誠実 このこともまたこの詩ではっきりと示されている。すなわち、

入門聞号咷 門に入れば号咷を聞く 幼子飢多てすでに卒す 幼子飢多てすでに卒すと 吾寧捨一哀 吾れ寧んぞ一哀を捨かんや 里巷亦嗚咽 里巷も亦嗚咽す 所愧為人父 愧づる所は人の父と為りて 無食致夭折 食無くして夭折を致せしなり

という箇所があつて、幼い子供が餓死したことを明らかにする。その責任を父として詩人はひしひしと感ずる。しかしその直後に脳裏に来つたのは、失業の徒や遠征の兵のことであつて、かくて

憂端齊終南 憂端 終南(山名)に齊しく 鴻洞不可撥 鴻洞として撥ふべからず

と、憂鬱きわまりないことをいって、この詩は終るのである。おのれの悲哀をおのれのものにはとどめ得ないで、一般社会に及ぼし、他人を考へて、なおさら悲しみや憤りや不安を深くするところ、杜甫が現代にも買われる理由があるのだが、それこそ自らを一



<蜀の棧道> 758年、華州の地方官に左遷された杜甫は、その地の大飢饉にあい、1年にして官を辞し、妻子とともに秦州に旅立つ。しかし秦州も安住の地ではない。彼はさらに旅をつづける。かつて玄宗皇帝が安祿山に追われ、長安から成都へ逃げのびた同じ蜀の棧道を越えて成都に向かった。「蜀道の難きは青天に上るよりも難し」と李白はその険しさをうたっている。

驢子、好男兒、前年学語時、聞知人客姓、誦得老夫詩（遺興）  
驢子、春猶隔、鶯歌暖正繁（憶幼子）

と、あるいはその幼いながら賢いのを自慢し、あるいは別れているのを悲しむ情を詠ずる。  
女兒に対しても愛情がふかく、その傑作「北征」では捕虜、逃亡、任官と多事ののち、音信不通だった妻子のところへの旅行を許され、帰宅した時の有様をうたう中に

牀前兩少女 牀前の兩少女

補綴才過膝 補綴わづかに膝を過ぐ

海図拆波濤 海図は波濤拆け

旧繡移曲折 旧繡移りて曲折す

天呉及紫鳳 天呉と紫鳳と

顛倒在短褐 顛倒して短褐に在り

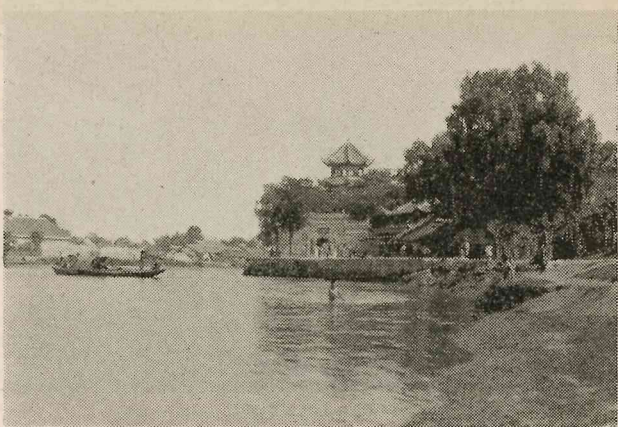
層の不幸に陥れる損な性質、たったといわざるを得ない。  
肉親の情 しかも杜甫は、天下国家のみを考える理想家ではない。よし理想家であったとしても、同時に肉親の情の非常に強かった人である。元来、中国詩人は、家庭の楽しみをめったにうたわれない。それが存在しなかったとは考えられないが、唐詩といわず、宋・元・明といわず、中国文学では、こういう一家の私事を文学にあらわすことは好まれなかった。それゆえ西洋文学なら珍しくない夫婦間の愛情、親子の情がめったに歌に出されない。

杜甫は中国詩人に珍しく、このたぐいの境地を比較的、頻繁に示している。息子が二人いて、宗文・宗武と名づけたが、下の方の宗武に対しては、とりわけ愛情があらわであって、これを驢子という幼名で呼び、

とこまかに写し出す。ベッドの前にいる二人のむすめは、つづくりの着物が膝までやととで、その海を描いた模様はきれが裂けているし、刺繍はつづかないであちこちしており、河童や鳳凰の絵は胴衣でさかさまになっているというので、このくわしい描写は貴婦人や美人の衣裳の描写以外には、他の詩人では見られないものである。しかもこれを見て杜甫は気持悪くなり病臥すること数日、そのあとでみやげの紅白粉や着物類の包みを解き与えたあと、

瘦妻面復光 瘦妻 面また光り  
痴女頭自櫛 痴女 頭みづから櫛けづる。  
学母無不為 母に学んでなきざるなく  
曉妝隨手抹 曉妝 手にまかせて抹す。  
移時施朱鉛 時を移して朱鉛を施せば  
狼藉画眉闊 狼藉 画眉闊し

瘦妻 面また光り  
痴女 頭みづから櫛けづる。  
母に学んでなきざるなく  
曉妝 手にまかせて抹す。  
時を移して朱鉛を施せば  
狼藉 画眉闊し



<成都> 759年、蜀の險道を越えて杜甫は成都につく。四川省一のこの都会は自然にめぐまれ、物資の豊かな地である。旧友嚴武（げんぶ）・高適（こうてき）らが居り、その友情に、彼はしばし漂泊の身をやすめる。清江 一曲 村を抱いて流る 長夏 江村 事々幽（しず）かなり 自ずから去り自ずから来る梁上の燕 相親しみ相近づく水中の鷗 老妻は紙に画きて菜局を為り 稚子は針を敲いて釣鉤を作る 多病 須（ま）つ所は唯薬物なり 微軀 此の外に更に何をか求めん 《江村》

しかしこの静かな都会もやがて乱に平和を破られ、杜甫は再び放浪の生活を送らなければならなかった。

<杜甫草堂> 成都に移った翌年の760年、杜甫は郊外の浣花溪（かんかけい）の西に新居をかまえ、以後3年、この地に幽棲、幾多の詩篇を生んだ。漂泊にその生涯をおえた彼にとって、この地での毎日は比較的静かな平和な日々であったようだ。



と、幼いむすめが櫛をつかい、なにもかも母のまねをして、ぬたくって朝化粧をし、ながい時間をかけて紅白粉をつけたが、かき肩はひどく太くかいてしまったと、滑稽な中に真の愛情のあふれ出るのを感じさせる。中国では古くから男児はまあまあ大切にすることが、女兒は薄遇である。杜甫はこの点からも異常なのである。

妻への愛情 とりわけこの詩でもあらわれたが、妻に対する愛情が、ところどころに見えて、これまた中国文学ではひどく珍らしいのである。

杜甫の生涯でやや平安な一時期はその四十九歳の時、成都の郊外に草堂をかまえたあとしばらくである。ここでの詩「江村」には

老妻画紙為菜局 老妻は紙に画きて菜局を為り  
稚子敲針作釣鉤 稚子は針を敲いて釣鉤を作る



<夔州(きしゅう)> 乱静まった杜甫は成都に帰るが、1年ばかりで、765年、揚子江を東に下って再び旅に出る。四川省東部、湖北省に近い夔州(奉節)についたのは翌年の春である。ここから湖北省宜昌にいたり、いわゆる三峡とよばれる険難の地があって、揚子江は切りたつた岩壁につつまれて東流する。杜甫はここに病の身を2年送り、さらに旅をつづける。

という箇所があつて、針をたたいてまげて釣針をつくつてくれたむすこと、紙に将棋盤を置いてくれた妻とをならべて写し、ともに感謝の情をあらわしている。西洋人にくらべれば非常にひかえ目ではあるが、それなればこそ一層めずらしい描写といわねばなるまい。とりわけ「進艇」という詩は

屋引老妻乗小艇 屋には老妻を引いて小艇に乗る

の句があつて、妻とボートに同乗して遊んだことをいう。これがどんなに珍しいことか、この間までの日本の夫婦の間柄からも想像がつくであらう。

このように家族に対しての愛情がおのずからあらわれた詩人なればこそ、はじめて周囲の者や苦しむ人民への同情がうそいつ

わりないと知られる。たしかにわれわれが子を床から蹴りおとして出家したという西行、一生めとらなかつたという芭蕉に対して描く肖像とちがうものを杜甫はもっていたのである。

叛乱者への憤り

それゆえ彼の最大傑作として芭蕉も愛誦した「春望」の詩などにも、背後にこれらの条件を置かなければ、まちがった解釈ができあがるだろう。

国破山河在 国破れて山河在り  
城春草木深 城春にして草木深し

は、たぐいまれな、純粋な愛国者としての詩人の、愛する国を破壊にみちびいた叛乱者に対する憤りがあると同時に、憎むべき叛乱軍にとらえられて、妻子と別れわかれとなり、おそらく再会を絶望した悲しみがあふれているのである。

烽火連三月 烽火三月に連り  
家書抵万金 家書万金に抵る

は詩的な誇張でない。家書はふたたび会えないと思われる妻からのたよりだからである。

白頭搔更短 白頭搔げばさらに短く  
渾欲不勝簪 渾べて簪に勝へざらんと欲す

も決して巧みな譬喩や *metonymy* ではなく、実際このとき詩人

といつて、晩年失意の詩人に救いとなるのは、酒あるのみと思われしめる。

もう一つの救い

しかし事實はもう一つ救いの手段があつた。これも詩人みずから語っている。

可惜 惜むべし  
花飛有底急 花飛ぶことなんの急か有る  
老去願春遲 老い去きては春の遅きを願ふ  
可惜歡娛地 惜むべし歡娛の地  
都非少壯時 都べて少壯の時にあらず

は頭髮みな白くなり、また薄くなったのにちがいない。巧みというには気の毒な詩人である。たくまずして、ただ真実をうたうだけでよかつたのだと、詩人みずからもういであらう。しかし客観的なレアリズムでなく、みずからの体験をレアリスチックにうたつて、それが世界文学でもこの上ない悲歌となつたのは、なんと気の毒なことだろう。わたしがはじめに、杜甫を定義して不遇といった底には、彼のこうした経歴があつたのだ。こ

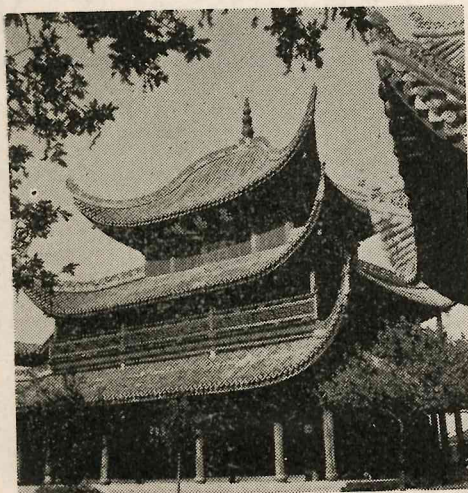
酒 詩人にもし救いがあつたとしたら、それは酒であつた。この点からも

朝顔にわれは飯くふ男かな  
と詠じた芭蕉とちがっている。李白のような豪酒ではなく、陶淵明のように酒をテーマとする詩も作らなかつたが、旧唐書の伝記では

永泰二年啗牛肉白酒 一夕而卒

と伝え、これは年度もちがうことが明らかに証明することく、ただの伝説であらうが、酒を好んだことは作品の諸所に見える。中でも上元二年、五十歳のころの作たる「絶句漫興」の第四は

二月巳破三月来 一月すでにつきて三月来る  
漸老逢春能幾回 漸老 春に逢ふ能く幾回ぞ  
莫思身外無窮事 思ふなかれ身外無窮の事  
且尽生前有限杯 かつ尽せ生前有限の杯



<岳陽樓(かくようろう)> 夔州(きしゅう)をたつて揚子江を漂泊、岳州洞庭湖を望む岳陽樓に登つたのは768年、江上に不帰の人となる2年前のことである。広大無限の湖の景観を眼前にして老詩人はうたっている。  
昔は聞く洞庭の水 今は上る岳陽樓  
吳楚は東南に萃(ひら)け 乾坤は日夜に浮ぶ  
親朋一字無く 老病孤舟有り  
戎馬(じゅうば) 関山の北 軒に憑(よ)れば涕酒(ていしゅう)に流る  
《岳陽樓に登る》

寛心応是酒 心を寛うするはまさにこれ酒なるべく  
遣興莫過詩 興を遣るは詩に過ぐるはなし  
此意陶潜解 この意は陶潜 解せしが  
吾生後汝期 わが生 汝の期に後る。

酒のほかに作詩がたのしみであることをいうのである。しかしその詩が後世まで伝わり、これほど愛されることは知っていたかどうか。「芸術は長く、人生は短し」はラテンのことわざであるが、わたしは杜甫も知っていたように思う。杜甫の時代は唐詩でも盛唐と区分され、才能のある詩人の輩出した時代である。李白は杜甫より十歳年上で、杜甫みずからも尊敬し、大きな影響を受けた。その李白は自分の詩が前人未踏であり、前人の詩が伝わったように、いやそれなればこそ、なおさら自分の詩が後世に伝わることを信じていた。死ぬ前の遺言も詩の保存のことのみをいった。杜甫のあと、これを尊敬し、模倣につとめたのは、その作品がわが平安朝に最も尊重された白居易であるが、後世に伝えるため、自らの作品を数か所に分けて保存した。これは李白・杜甫以上に生存中に高く評価され、その評価をこまたまみずから知っていたが、なお後世をも恃みとしたのである。

こんなことから杜甫が後世をたのみとしたことは、十分に察せられる。なお杜甫は不遇だといったが、別世界に住む俗人とはついに協和しなかったが、同時代の詩人とは、前述の先輩李白をはじめ岑参、高適らすべてと交際があり、それもきわめて親密であった。これらの詩人がすべて杜甫の詩を高く評価していたことは疑いない。詩作の盛んな時代に生き、作者であると同時にそれゆ

## 白居易

大野実之助

中唐詩人中最も広く世に知られ、かつ平安朝時代以来日本文学に最も大きな影響を与えて来た白居易とは、いかなる経歴の人であろうか。まずその概略を考えると、つぎの如くである。

白居易は字を樂天と称し、香山居士と号したが、その七世の祖「白建」は太原の人で、北齊の時「五兵尚書」の官に在った。この「白建」から「士通」「志善」「温」「鎰」を経て「鎰」の子「季庚」というのが彭城令から襄州別駕の官に遷った人で、この「季庚」の第二子が即ち白居易で、居易は代宗の大曆七年（七七二年）光仁天皇宝龜三年（正月二十日）鄭州新鄭県（河南開封道所屬）東郭の宅に生れ、生来敏悟人に絶したといわれ、生れて六、七か月にしてすでに「之」「無」の二字を默識し、指を以てたずねて見るに「も誤る」ことがなかったという伝説的な話まで伝わっており、五、六歳にしてすでに詩を学び、九歳にして声韻を暗誦したという天才児であった。貞元三年（七八七年）桓武天皇延暦六年（十六歳）の年をはじめて都に上り、自作の文をもって當時すでに都で名を成していた顧況に面会を求めたが、顧況

えにこそ正当な批判者であり理解者である。これらの詩人の尊敬は、杜甫はうれしく受けとったことと思う。この点からすれば杜甫は決して不遇ではなかったし、いまはもとより不遇ではない。写真集

### アンデスを越えて

— 国産車全南米縦断 — カメラ 川島吉雄  
産経新聞社 南米踏査班 編

アンデス山脈を国産車を駆って走破し、日系人の生活を紹介。新聞記者 最高の栄誉ポイン賞受賞作。  
B5判・原色版・グラビア二三四頁・¥四五〇

### 瀬戸内海

カメラ 中村由信  
本文執筆 宮本常一  
重森弘淹

島と海と明るい日の光。すぐれたカメラアイとエッセイが描く、瀬戸内海の自然と人間の織りなすくらし。  
B5判・グラビア六四頁・本文三三頁・¥四五〇

### ピカソ

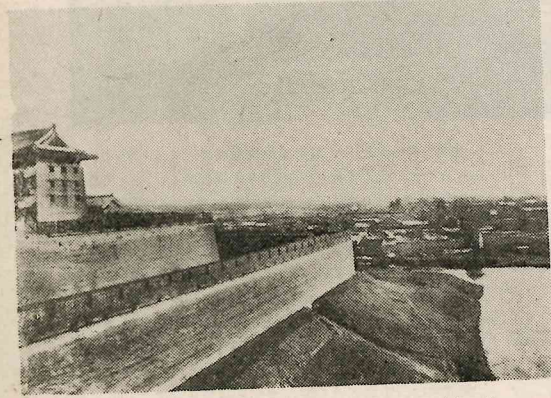
— 人間の記録 —

浜村順編

ピカソくらい多くの論評、賞賛の言葉が投げかけられた二十世紀の画家はない。写真が語る、人間ピカソ！  
B5判・グラビア六四頁・本文三三頁・¥四三〇

写真集

はじめ取るに足らぬ少年として軽侮の念を抱き、その求めに応じることを潔しとしなかったが、持参の文を見て大いに歎服し、絶賛したということ、これが居易の他人に認められたはじめである。貞元十六年（八〇〇年）二月二十九歳にして進士の試に應じ第四等を以て合格し、その翌翌年再び登庸の試に應じ等に入って「校書郎」を授けられ、これが居易の官吏生活の第一歩である。その後憲宗の元和元年（八〇六年）「盪屋尉」となり、翌元和二年「集賢校理」に任ぜられ、同年十一月試験を経て「翰林学士」となり、翌元和三年三十七歳の時「左拾遺」に叙せられ、元和五年三十九歳にして「京兆戸曹参軍」となり、元和六年四月退官して以来元和八年に至るまで渭南（長安郊外の村落）の家に閑居し、元和九年再び朝廷に入っ



<西安城より南方を望む> 長安の興亡の歴史は古い。今は西安近傍に位置する。河南の洛陽とは互いに首都となりながら拮抗してきた。唐朝の長安は、国際文化都市として発展した。長安城は、まったく机上のプラン通り造られた、中国建築史上画期的なものでもあったが、のち韓建が皇城の地だけ残して新城を築いた。これが今の西安城の基礎である。しかし、以後の長安は一地方都市にしかすぎなくなっている。  
李白が死んで十年、杜甫が逝って二年、韓愈（かんゆ）5歳のとき、白居易は洛陽の東の都市に生まれた。口のきけぬさきに文字を覚え、5歳で作詩を知ったといわれる神童であった。16歳の頃、初めて上京し当時の名士顧況（こきょう）に面会した。況は青二才と軽くあしらったが、「賦得古原墓送別」の詩に目をとめると、嗟嘆しておかなかったという。彼の文学の出發ともいえるだろうか。のち彼は幾度も官吏として長安にとどまり、また離別している。